

場所 アメリカ合衆国ニュージャージー州

期間 2007年8月12日～8月20日（8日間）

1. はじめに

2007年3月末、花王教員フェローシップのパンフレットが学校に届いた。実は、1年前からこのプロジェクトを知ってはいたものの、「日常程度の英語力が必要」の一文に、私のココロにはブレキがかけられていた。でも、2006年に別の団体でフィリピンでのマングローブの植樹に参加し、ほんの僅かな自信を得ていた私は、思い切って参加希望を出すことにした。

海外での仕事に興味がある。環境教育にも関心がある。でも何よりも強かったのは「自分をもっともっと成長させたい！」という気持ちだった。

教員になって5年。毎日の生活の中で、そして自ら進んで参加した研修やボランティアを通して、自分は少しずつではあっても着実に成長している、という実感があつた。今回の経験を通して、どのような出会いがあり、自分がどこまで成長できるのか、少なからず不安はあつたけれど、やっぱり大きな期待を抱きながら日本を旅立った。

2. 調査内容

調査活動は、trapping、tracking、Sedge Island での調査、ライトハウスセンターでの調査に分けられる。

（1）trapping

その名の通り、『カメを捕まえる』ための仕事である。まず、ライトハウスセンターでカメを捕まえるためのネットを用意する。写真1はそのネットのやぶれている場所を補修しているところである。（ネットの中には、カニが入ってくることが多く、破れてしまうらしい。）



写真 1

そのネット等をボートに乗せてバーネガット湾まで運び、各調査場所に設置する。ここは塩性湿地のため、水の中に足を踏み入れると何とも言えない感触。底の見えない泥水の中を一步ずつ慎重に進む。しかし、足をとられてしまい水浸しになってしまう人も。

数日後、各調査場所（10カ所ぐらいいはある）をボートで回り、カメが入っているかを確認する（写真2）。このとき、罠の中にあるのはほとんどがカニだった。ときどき、カメが入っていると聞こえるボランティアたちの「Terrapin!」の声。カメにとっては災難かも知れないけれど、こちらにしては出会えて嬉しい喜びでいっぱいだった。調査のため、しばし袋に入ってもらい、ライトハウスセンターに持ち帰る。



写真 2

さらに、各調査場所では、その場所の正確な位置（GPS）、

調査した時間、水温などを記録（写真3）。その記録と捕まえたカメはライトハウスセンターでの調査に使用する。

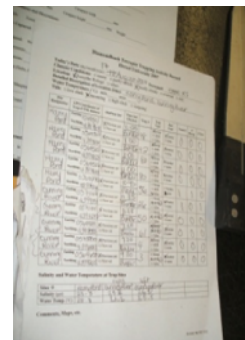


写真 3

(2) tracking

捕まえたカメに発信機をつけて放し、そのカメの行動を把握する調査がある。その『カメを探す』調査である。このプロジェクトは、大学院生ジャッキーが中心となり、いつも連れて行ってくれた。

探査機を持つ姿はいつ見ても凛々しい（写真4）。



写真 4

この調査では、カメに取り付けられた発信機からの信号を受け取るため、まずボートにアンテナをとりつける。さらに、写真4でジャッキーが持っている小さなアンテナを持ってカメを探し回る。このとき、ジャッキーのアンテナにはトランシーバーのようなものがついており、カメが近付くとそこから「ピピッ、ピピッ」という音がする。カメが水の中に入ってしまうと音は聞こえないのだが、草原内にいるときは近づいていくとどンドン音が大きくなっていき、同時にこちらの期待もどンドン膨らんでいく。



写真 5

そして、ついに発見！たいてい、草の中に身を隠すようにして休んでいるところだった（写真5）。ここでも、その場所の正確な位置（GPS）、調査した時間、風向風速なども測定し記録する。ここで発見したカメは、センターに持ち帰ることもあれば、そのままにして帰ることもある。

(3) Sedge Islandでの調査

バーネガット湾をいつもの調査場所よりも少し沖の方に進んだところに Sedge Island がある。そこでは『カメが卵からかえるときの適切な条件』についての調査が行われている。

カメの卵はそれぞれの巣に埋められ、地中の温度や湿度を測定し、その変化を記録する（写真6）。ここでは、ネットで陰になっている巣と日向の巣、さらに温度は表面、中部、下部と分けられ、



写真 6

細かく測定されていた。写真7は温度を測定している場面である。

さらに、ここには環境教育センターのようなものが併設され、観測者が宿泊できるような施設もあった。写真8はそのセンターで作られたポスターである。



写真 7

期間中1日しかここに来ることはなかったが、この日はとても天気が良く、Sedge Island がとても美しい場所であることが写真でもよくわかると思う（写真9）。また、ライトハウスセンターで卵からかえった子ガメをここで放すことになった。水中に放す

のかと思いきや草むらの中へ。子ガメ（写真10）の先行きを案じ、ていねいにお別れのあいさつをした。

また、ここは「100匹以上の蚊が背中についていた！」とボランティアの間でうわさになるほど蚊が多くいたことも忘れられない思い出である。



写真 8



写真 9



写真 10

(4) ライトハウスセンターでの調査

持ち帰ったカメについての調査を行うのが、ライトハウスセンターである。私たちが宿泊していた施設のすぐそばに研究室があり、いくつかの作業が行われた。

- ① 記録用紙にそのカメを見つけた日付、場所、温度などの記入
- ② オスかメスかの確認
- ③ 大きさを測る。
- ④ マイクロチップをうめる（写真11）。
- ⑤ 甲羅に印をつける（写真12）。
- ⑥ DNAの検査のため血液の採取（写真13）

このような作業をしたあと、次の調査で湾に行くときに水中に放す。ときには死んでしまうカメもいるらしく、別の日には解剖を見ることもできた。



写真 11



写真 12

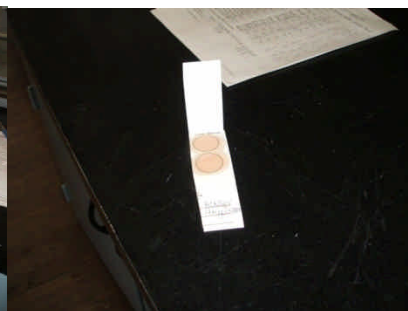


写真 13

3. ボランティアの生活

(1) 調査日

調査のある日は、たいてい3つのグループに分けられ、それぞれのグループが trapping、tracking、Sedge Island での調査のどれかに所属し、4人程度のメンバーで活動した。グループ

のメンバーも活動内容も日々変更されるので、1つの調査内容を継続するのではなくいくつかの内容を少しずつ体験することができた。

このとき、各グループに一人の大学院生がリーダーとして参加し、彼女たちが車でボートを運び、湾に出るときも彼女たちが1人で指示を出していた。ボランティアは彼女たちのサポートをするのだが、英語力の低い私にも、丁寧に作業内容を教えてくれるなど、彼女たちの自立した態度と人間性の豊かさにいつも感心させられた。

湿地での作業は午前中で終わることが多く、14時ごろにはセンターに帰り、その後センターの作業を行ったり、ときにはカニを釣りに行ったりすることもあった。

また、夜はプレゼンテーションがある日がほとんどで、ジム教授のレクチャーや学生の研究発表などが行われた。

(2) 余暇活動

4日目に、ジェンキンソン・アクアリウムへ連れて行ってくれた。この水族館でも、環境教育に力を入れており、ダイヤモンドガメを始めバーネガット湾の生態系について理解できるような展示室もつくられていた。



5日目には、パイン・バレンズでのカヌー。とても美しい森の中を流れる小川をゆっくりと下っていく。小学生の集団に激突されることもあったが、それ以外は本当に別世界に来たかのような不思議な気持ちになった。その後、一度センターに戻ってから、灯台へ。おみやげを見たり、チョコがコーティングされた珍しいアイス（写真14）を食べたりした。特にこの日は、アメリカの生活様式を垣間見られたように思う。何よりボランティアのみんなといろいろなおしゃべりができたことが大きかった。拙い英語でも、お互いの気持ちがあればきっと通じる、

写真 14

と改めて実感した。

7日目の夜には、アルベルトミュージックホールにてカントリーミュージックを聞くことができた。一般のバンドのようだったけれど、会場全体の一体感のようなものに圧倒された。そして、音楽を愛する人たちの気持ちを感じることができた。

以上の活動以外にも、夕食や朝食を外のレストランに食事に行ったり、近くのスーパーにおみやげを買いに連れていってくれたりもした。さらに、空いた時間には折り紙を折るなどして交流することもできた。英語でのクイズ大会になったときはさすがに何もできなかったけれど、自分ができるものを持って行ったり、なんでもいいからとにかく言葉にすることの大切さを学んだ。しかし、英語力があればもっともっといろいろなことが語り合えたのになあという後悔は、いまでも充分にある。

4. 学校教育への還元

以上のような活動を通して自分が得たものを、学校教育へ還元していこうと思う。とくに、下の3つの点について取り組んでいきたい。

(1) 理科教育において

中学3年の『自然と人間』という単元がある。まず、食物連鎖について学ぶ場面で、バーネガット湾の生態系について取り上げたい。身近な自然環境について学ぶと同時に、世界各国で生態系が脅かされていたり、それについて研究している人々がいることを伝えたい。

また、身近な自然環境について調査する小単元では、学校近くを流れる河川の調査を行いたい。その場合、今回の調査でも使用したような記録用紙を用意し、継続的に調査を行うことを目標としたい。結果から得られることを自ら考察し、さらに解決策を考えていくような態度を持たせる必要があると感じる。

(2) 総合的な学習の時間において

本校では、例年1学年で地域の環境についての調査や緑化活動を行っている。このときを利用して、(1)にも述べたように、継続的な調査を行わせたい。『環境』とは、時間的にも空間的にも物質的にも断片的に捉えていたのでは、全体像が明らかにならないこと、本当の原因が見えてこないことを理解させたい。また、毎年1学年で行えるのであれば、学校全体の取り組みとして数年間の変化を記録していくことも可能であると考える。

(3) 日々の生活の中で

今回の経験で自分は、さらに成長することができた、といまはっきりと感じられる。不安を乗り越えてアメリカへ旅立ったことも、英語漬けの毎日の中で何とか生活してきたことも、自分を強くしてくれたと思う。また、何より多くのボランティアやスタッフとの思い出、そしてともに日本から参加した下山先生と悩みを共有したり、ささいなことで大笑いした思い出が自分の心に大きく残っていることもココロの支えになっている。

「人は人と関わることで成長することができる」ということを身をもって体験することができた。このことを是非、生徒にも伝えていきたい。学級での人間関係、教員との関係、家庭での関係、社会との関係など、どんなときも人との関わりは避けて通れない。また、より良い関係を築くことで自分をより高めていけることに気付かせたい。そして、いずれ社会に出たときに、周囲の人々と、さらには外国の方々と、より良い関係を築ける大人に育てていきたい、と思う。

5. おわりに

この場をお借りして、資金援助をいただいた花王の方々、書類の準備等で大変お世話になったアースウォッチの方々、現地では本当にお世話になったスタッフ、ボランティア、下山先生、ころよく送り出してくれた蒲田中の先生方にお礼申し上げます。